



[研究要旨]

徳川将軍家と広島藩浅野家

— 大奥から大名家へのお輿入れ —

尾道市立大学経済情報学部経済情報学科講師
森本 幾子

本講座では、近世後期における徳川将軍家と広島藩の関係を、天保4年（1833）の広島藩九代藩主浅野齐肃と徳川十一代将軍二十四女（末姫）の婚姻を通して紹介し、近世後期の広島藩政における大奥からの正妻降嫁の意味について考察を行った。

1. 徳川将軍家と広島藩浅野家

徳川将軍家と広島藩浅野家の関係をみると、広島藩初代藩主浅野長晟の正室が徳川家康の娘（振姫）であったことや、二代藩主浅野光晟が三代将軍徳川家光と従兄弟であったことなどから、藩政初期より深い血縁関係によって結ばれていた。さらに、二代藩主浅野光晟治世時以降、広島藩主は「松平安芸守」を唱えるようになり、本家は公的に「松平」姓を名乗るようになった。慶安元年（1648）には、広島城下に外祖父徳川家康を祀る東照宮を遷座し、幕府に対する忠誠を表明することによって、広島藩は領内における幕藩体制確立の内面化を図った。

2. 大奥からの正室降嫁

近世後期の広島藩では、浅野齐肃が九代藩主に就任し、関蔵人・今中大学など執政年寄の実質的権力掌握のもと、大坂商人に大きく依存した財政政策が採用され、領外市場における正金銀獲得のため国産専売政策を推進していた。この頃、広島藩の蔵元であった鴻池善右衛門からの借財は、過去最高額に達し、天保8年(1837)には、これまでの「用談慣行」も破棄されるに至った。徳川将軍家との縁組は、このような財政難のさ中で行われたのである。

天保4年(1833)11月、正式に徳川十一代将軍家斉の二十四女末姫と広島藩九代藩主浅野齐肃の婚儀がととのい、広島藩は将軍家から正妻を迎えることとなった。本来、徳川将軍家から正妻を迎える場合の婚礼は、正式には「御入輿御婚礼」と呼ばれていたが、十一代将軍家斉治世時の文化文政期～天保期にかけては、幕府・諸藩ともに経済的に逼迫した状況であったため、「御引移御婚礼」と呼ばれ、略式化されるようになっていた。幕府老中からも、広島藩に対して婚礼の略式化についての通達がなされたが（〔松平安芸守末姫君御引移一件〕〔広島県立文書館「千葉家文書」〕）、略式とは言え、将軍家からの降嫁には多額の費用を要したため、ますます大坂商人からの借銀に依存せざるを得ない状況となった。

広島藩執政年寄の関蔵人と今中大学は、藩主浅野齐肃とともに江戸城へ登城し（江戸城に登城する際には「年寄」ではなく「家老」という名称に変わる）、婚礼全般を取り仕切ることによって（「姫君様御入輿御前後要用控」〔広島大学中央図書館所蔵「今中文庫」〕）、幕府役人との関係（人脈）構築を目論み、幕府と広島藩の結びつきをより強固なものにしようとしていたことが伺える。

3. 婚礼費用

この婚礼において、広島藩が支出しなければならない主な費用は、①広島藩上屋敷の増築費用を含む諸経費、②徳川将軍家（将軍・御台・江戸城本丸および西丸の老中・惣女中など）へのお礼の品々、③新たに末姫に付けられる浅野家家中への広島藩勘定所からの出費、④大奥から広島藩上屋敷に入る約50名の「幕府女中」への宛行などであった（「御住居諸品控 天保四年」〔広島大学中央図書館所蔵「今中文庫」〕）。

これらの諸経費が藩財政に占める割合について検討してみたい。【表1】の嘉永7年(1853)頃の広島藩の財政収支をみると、収入源としての年貢米250,000石（広島藩の石高は420,000石余なので五ツ物成で換算）を金に換算すると、416,666両となっている（ただし、これは当時の広島藩執政年寄が、家老の諮問に応じて提出したもので、藩財政の実態からはきわめてかけ離れているとされているが、支出内容とその比率が判明する。）。つづけて【表2】をみると、

表1 天保4年(1833)末姫御婚礼に要する費用

合計：11万813両8匁3分7厘	
内	費用名目
580両余 67貫余	御献上物御進物代
1,593両余 11匁1分8厘	姫君様より御献上物御進物御備え
1万2831両余 45貫余	御道具その他御勘定所出来
5,012両余 34貫余	御蔵所女中衆料理向支度料代
3万3,184両余 185貫余	御住居御作事所普請
156貫余	御納戸入用
4,401両余 20貫余	中奥女中共諸用方
9貫余	御合力
1,094両余 22貫余	御内用払
1,544両余 9貫余	諸支払
14両余 6貫余	万支払
14両余 3貫余	旅行払
1,047両余 15貫余	御家来払
1,728両余 21貫余	御扶持米代
32貫余	侍中引渡し
11貫余	御書翰方渡し
2万9,994両余	御入用
1,002両余 6貫余	御内々の御進物代
1,501両余	万屋払い残り

注) 今中文庫 A 41-4 「御住居諸品控 天保四年」(広島大学中央図書館所蔵)より作成。

末姫との婚礼に要する費用の合計が110,813両余となっているので、単純に見積もっても、少なくとも現米収入の約四分一にあたる費用が、末姫の降嫁には必要であったことが分かる。

とりわけ多額の費用を計上したのは、「御住居御作事所普請」(33,184両と銀185貫余)で、広島藩江戸上屋敷における末姫と大奥から入る約50名にのぼる「幕府女中」たちの生活空間の増築費用であった。

表2 嘉永6年(1863)頃の広島藩財政収支

費目		米(石)	⇒金に換算(両)	同百分比(%)
収入	現米	250,000	416,666	100
支出	大坂借財払・江戸暮向	70,000	116,666	28
	銀札代	30,000	50,000	12
	国元暮向	30,000	50,000	12
	家中其外扶持方	120,000	200,000	48
	住居用賄	12,000	20,000	4.8
	姫君様御化粧料	1,800	3,000	0.7
	支出計		263,800	439,666
差引		-13,800	-23,000	-5.5

注) 『広島県史 近世2』より作成。

これは、広島藩年寄が、家老の諮問に応じて見積もったもので、藩財政の実態からはきわめてかけ離れているとされているが、支出の内容とその比率が分かる。

4. 他大名家からの祝儀の品々

広島藩主浅野齐肃と末姫の婚礼に際しては、計57の大名家から祝儀の品々が贈られ、これが末姫の嫁入道具として広島藩江戸上屋敷に入れられた。これらは実際には、江戸城の作事場で製作されたものである。浅野齐肃の朝廷官位は「従四位下」、江戸城での詰間は「大広間」で、おもにこれとほぼ同格または上格の大名家から祝儀の品が贈られている(「[松平安芸守末姫君御引移一件]」(広島県立文書館所蔵「千葉家文書」))。

例えば、同格の大名家では、松平伊予守(備前国岡山藩主池田齐敏(31万5,200石))から「御膳十人前」、松平大膳大夫(長門国萩藩主毛利齐元(36万9,000石余))から「御膳部一通・御行器具一荷」、松平備前守(筑前国福岡藩主黒田齐清(52万石余))から「御台子一通・御屏風一双」、松平大隈守(薩摩国鹿児島藩主島津齐興(77万800石))から「縮緬幕三」がそ

れぞれ贈られている。

さらに、格式が上の御三家からは、紀伊大納言（紀伊国和歌山藩主徳川斉温（55万5,000石））から「御膳部一通・御貝桶一対」、尾張中納言（尾張国名古屋藩主徳川斉朝（61万9,500石））から「御厨子棚一銚・御屏風一双」、水戸宰相（常陸国水戸藩主徳川斉昭（35万石））から「御書棚一・御台子一通」などがそれぞれ贈られている。このように、徳川將軍家と大名家との婚姻を通して、とくに同格の大名家同士の交際が継続され、関係の強化が図られたものと考えられる。

5. 「御住居」（末姫）の権力

將軍家から降嫁した末姫は「御住居様」と呼ばれていた。広島藩上屋敷における浅野斉肅と末姫の生活は、ほぼ末姫上位のもとに営まれ、「御住居」の権力、つまり実家である徳川將軍家側の大きさを示すものであった。例えば、末姫の食事は、幕府・広島藩両方から御膳が出され、このうち末姫は、実家である徳川將軍家から用意されたものを食し、広島藩が準備したものについては、手は付けないが、一応食したという態にしていたようである。また、表向きには困難なため、庭を通り抜けるという形をとって父親である將軍家斉が広島藩上屋敷の末姫に会いに訪れることもあった（『むかしばなし』十二代藩主浅野長勲公回想）。末姫は基本的に広島藩江戸上屋敷で生活し、広島入りすることはなかったものと思われる。天保6年（1835）の浅野斉肅の広島初入国（江戸で家督を継いで以降、初めて藩主として領国に入ること）以降も、浅野斉肅と末姫は、「早道」と呼ばれる江戸－広島間の公式書状（月2回程度往復）によって互いの息災を確認し合っている（「日記」（広島大学中央図書館所蔵「今中文庫」））。

6. 將軍家からの正室降嫁と広島藩政における意味

ところで、大奥からの正妻の降嫁は、大名家にとってどのような意味を持っていたのであろうか。天保10年（1839）正月9日の年寄今中大学の日記には、「此度武州穩田村熊野権現社地其外同所地続畑地共姫君様御願之通り殿様御拜領被遊候ニ付、殿様江為御歎惣出仕御帖附今日五半時麻上下着登城いたし候事」と記され、「武州穩田村」（現在の東京都渋谷区神宮前で、浅野家内証分家があった場所）の権現社地とその他それに続く畑地が、「姫君様御願之通り」に藩主浅野斉肅に拜領されたことが分かる。つまり、幕府からの所領の安堵には、大奥から降嫁した末姫の助言があったことがこの記載から伺える。

さらに、天保6年（1835）、広島藩は藩主浅野斉肅の初入国に合わせ、広島城の長の方角に（北

東で鬼門を指す)、太祖浅野長政を祀る神廟「二葉山御社（現在の広島市東区饒津神社）」を造営した。太祖浅野長政の神廟造営は、歴代藩主の悲願であったが、これまでそれが叶うことはなく、斉肅の代に至って初めて造営が成し遂げられたのであった。

そもそも、大名家の太祖を祀るためには、幕府の許可と京都の吉田家からの「大明神号」の神号授与が不可欠であったが、広島藩年寄閑蔵人と今中大学は、天保4年における藩主浅野斉肅と末姫との婚礼準備に際して、幕府役人のうち寺社の管理に係わる寺社奉行との人脈を築いていたことから（「姫君様御入輿御前後要用控」（広島大学中央図書館所蔵「今中文庫」））、広島藩における新たな神廟の造営許可を得ることができたのではないかと考えられる。さらに、徳川将軍家との婚姻は、京都の吉田家の広島藩に対する「大明神号」授与の大きな根拠となったものと思われる。

以上のように、徳川将軍家からの正室の降嫁は、近世後期の広島藩にとって莫大な費用を要するものであったが、一方で、幕府からの所領安堵、幕府との関係の再構築、諸大名家との交際と関係強化、領内における神廟造営許可等において重要な役割を果たしたのではないかと考えられる。今後、大奥からの正室降嫁の広島藩政における意義については、官位上昇などの点も含め、さらに考察を深めていく必要がある。

おもな参考文献

- 『広島市史』第3巻（広島市、1923年）
『広島市史 社寺誌』（広島市、1924年）
「藝藩三十三年録」（小鷹狩元凱『元凱十著』弘洲雨屋、1930年）
『広島県史 近世2 通史IV』（広島県、1984年）
土井作治『幕藩制国家の展開』（溪水社、1985年）
勝矢倫生『広島藩地方書の研究』（英伝社、1999年）
岸本覚『明治維新期の政治文化』（思文閣出版、2005年）
『今中文庫目録－近世今中家と広島藩』（広島大学出版会、2006年）
畑 尚子『徳川政権下の大奥と奥女中』（岩波書店、2009年）
福田千鶴「奥女中の世界」（『＜江戸＞の人と身分4 身分の中の女性』吉川弘文館、2010年）
三宅智志「大名の婚姻に関する一考察－幕末外様国持の海防動員に関連して－」（『佛敎大学大学院紀要』第39号、2011年）